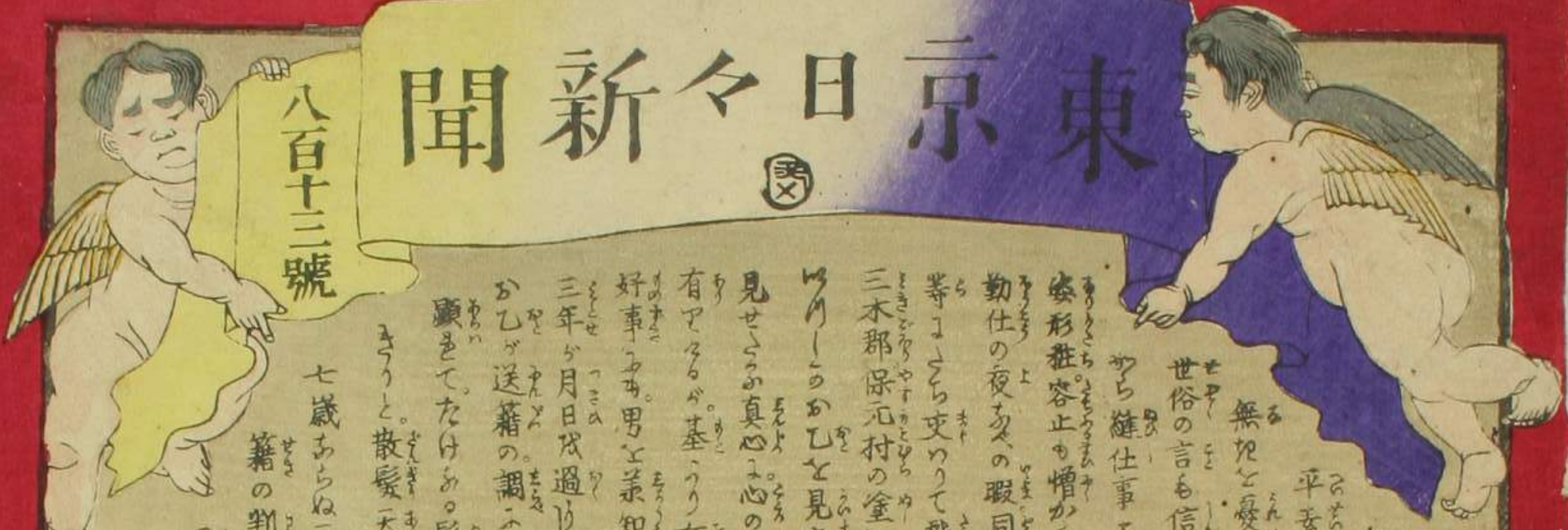


東京日々新聞

八百十三號



先入主とあるは古人の確言馴るよりて性も又
 自然と愛字の物なるは讃州香川の郡あり東上の村内ふ
 平素女子と思ひたる。おしや兩親の兒育の
 無犯を愛て男子あり女子の名を付け育てて
 世俗の言も信愛し暑さ寒さの衣類より。髪化粧
 から縫仕事と総て女子に模倣せしむ。習ひに氣質と
 姿形粧容止も憎からぬ十八歳に同國より。高松藩の某へ婢
 勤仕の夜更の暇同家の殿女と夜通ふ。近隣に婦女子
 等より支りて戯るも。更な疑へ人もあらず。然るに同國
 三木郡保元村の塗師職なる。早藏と呼ぶ男あり
 けり。おしを見惑く思ひの文を繕合せ木地を
 見せしむ。真心の底を研出。云ふ事あり
 有てなるが。基より女子ふあらざりと。密に若きや
 好事。男子と兼知で婚禮あり。
 三年か月日改過。日頃日
 おしや送籍の調へ事あり
 願きてたけぬ。髪をみん
 きうりと散髪。天頭の男よき色
 七歳あらぬ。二拾五で男女の
 籍の判然。是赫々あり
 聖代の御恩澤と云ふもの
 實に痴愚譚よすや

墨陀西所
 温克龍吟誌



一蕙齋芳幾



眞足屋
 度影米

